『形而上学』Θ巻におけるメガラ派論駁の射程[1]

河　谷　　淳

本論考の対象と目的

現実性と可能性・能力との関係をどう考えるべきなのかという問いは、古くて新しい哲学的問題のひとつであると思われるが、『形而上学』Θ巻（第9巻）第3章でアリストテレスが論駁の標的として据えているのは、「現実的なことだけが可能である」と主張する、いわゆる「メガラ派」である[2]。その論駁にあたってアリストテレスはまず、「こうした主張に奇妙な帰結が生じるのを見るのは難しくない」と述べた上で、具体的には後で見るように、そうした主張から三通りの仕方で不合理な帰結が導かれることを示すことで、メガラ派に対して次のような最終診断を下すにいたる。

> 「もし以上のことを語ることがありえないのだとすれば、可能（*dunamis*）とその実現とが異なることは明らかである。（メガラ派の議論は可能とその実現とを同じものとみなしており、それゆえ、些細ならざることを棄却しようとしている。）したがって、可能ではある（*dunaton*）が現実ではない、また、そうでないことも可能でありはするが現実にはそうある、ということもあってもよいわけであり、その他の述語についても同様であって、現実に歩いていなくても歩くことは可能であり、現実に歩いていても歩かないことは可能なのである。」（1047a17-24）

アリストテレスの立場からすれば、「可能」とその「実現」とは峻別されるべきであり、またそれゆえ、「可能ではあるが実現していない」という事態をも積極的に認める必要があるが、それに反して、メガラ派は可能とその実現とを混同してし

まっていることになる。本論考の目的は、『形而上学』Θ 巻第 3 章で展開されるこうしたメガラ派論駁の議論を、必要があれば潜在的な前提をも顕在化させながら分析し、その議論の射程を検討することにある。

ここで、アリストテレスによる具体的な論述を見る前に、まずはメガラ派との争点になる「デュナミス（*dunamis*）」の訳語の選択について述べておくことにしたい。先の引用箇所で「可能」と訳しておいた名詞「デュナミス」とその形容詞「デュナトン（*dunaton*）」あるいは動詞「デュナスタイ（*dunasthai*）」は、文脈によって「可能性（possibility）」・「可能である（possible）」または「能力（capacity）」・「能力がある（capable）」と訳される場合がある。この問題は、単なる翻訳の問題のみならず、内容解釈上の問題でもある。

確かに、いくつかの点で「能力」と「可能性」とは区別されうることはまちがいない。ここでの作業仮説として次のような論点をあげることができよう[3]。

1）担い手の有無：「能力」はその担い手を必要とするが、「可能性」は必ずしもそれを必要とはしない（「能力の担い手の必要性」）。あるいは、ビアー（Beere）の表現を借りれば、「能力」は「もの（things）」にかかわるが、「可能性」は「事態（states of affairs）」にかかわる[4]。この論点に関連して、「能力」の場合には、生得的である場合を除けば、それを獲得するプロセスを語りうるが、「可能性」の場合にはその獲得のプロセスはそれほど明確ではないという点も付け加えることができよう。

2）反復の有無：「能力」の場合にはそれを反復して行使しうることが要請されるが、「可能性」の場合には必ずしもそうではない。つまり、いったん能力を身につけた人物・事物は、それを喪失することがない限りその能力を保持し続けることが期待されるが、「可能性」の場合にはその点が必ず問われるわけではない。

だが、「能力」と「可能性」とをこのように区別できるにもかかわらず、これら二つの概念をアリストテレスが、「デュナミス」という同一の語で表現していることもまた紛れもない事実であり、それを解釈に先立って訳し分けることは、むしろ論点先取にもなりかねない。そこで、本論考でギリシア語テクストを翻訳・引用するにあたっては、「可能」という翻訳語を、能力と可能性を包括するものと約定して用いることにしたい。

「メガラ派」の主張の定式化

『形而上学』Θ巻第3章でのメガラ派論駁の議論においては、「可能性」や「能力」を意味するギリシア語の名詞「デュナミス」とその形容詞「デュナトン」ならびに動詞「デュナスタイ」の三つの表現が、特に断りもなく相互に置き換えられながら用いられているが、第3章の冒頭では、可能性・能力がまずは動詞「デュナスタイ」によって表現された上でメガラ派の立場が次のように紹介されている。

> 「メガラ派の人たちのように、実現している場合にのみそうすることが可能（*dunasthai*）であって、実現していない場合にはそうすることは可能ではない、と主張する人々がいる。例えば、現実に建築していない者は建築することが可能ではなく、現実に建築している場合に、建築している者は［建築することが可能である］と彼らは主張する。」（1046b29-32）

こうした見解に対するアリストテレスの具体的な批判を見る前に、まずは標的となる「メガラ派」の主張の同定の仕方を確認しておくことにしたい。

この引用箇所において、その同定の適否はともかく、アリストテレスがメガラ派あるいはそれに類似した人々に帰している主張（これを以下ではMと呼ぶことにする）を整理してみるならば、ここでは次のような二通りの仕方で一般的な定式が与えられていることになる。

M1：現実にAをしている場合にのみAをすることが可能である

M2：現実にAをしていないならばAをすることは可能ではない

ここで、一般に「Pである場合にのみQである」は「QならばPである」と同値であるから、M1はさらに次のような条件文としても定式化でき、その場合、M2はM1の対偶とみなすことができる。そこで、改めてM1とM2とを書き出してみるならば次のようなものとなる。

M1：Aをすることが可能であるならば現実にAをしている

M2：現実にAをしていないならばAをすることは可能ではない［M1の対偶］

先の引用箇所でアリストテレスは、こうした一般的な定式化を行った上で、メ

ガラ派の主張を「建築する」という具体的な事例に即して説明している。M1・M2の適用関係を丸括弧で示しながら、その具体的事例を整理するならば、それぞれは暫定的には次のようなものとなろう。

M3：現実に建築していないならば建築することは可能ではない（M2）

M4：現実に建築している場合に建築することが可能である（M1の逆）

このように整理してよいとすれば、M3（M2＝M1）とM4（M1の逆）とは実質的には互いに逆命題の関係にあることになり、それゆえ、M3とM4とを同時に主張することは、一般化すれば、メイキン（Makin）がMをそう理解するように[5]、次のような双条件的な原則を語っていることになる。

Aをすることが可能である⇔現実にAをしている

しかしながら、仮にこのようにM4を「M1の逆」として理解するのであれば、一般的な定式M1・M2とその具体的な適用例であるはずのM4とがうまく対応していないという解釈上の難点が浮上してくることになる。さらに、ことがらとして考えてみるならば、こうした二つの適用例のうちM4はそれほど奇妙な主張とは言えない。というのも、例えばアリストテレスのようにM1・M2に同意しない人であってもM4を認めることはありうるからである。むしろ、逆に、M4を認めない人の方がその論拠を示す必要に迫られることになろう。なぜなら、M4を認めないということは、「ある人が現実に建築してはいるが、その人が建築することは可能ではない」という事態、つまり、「可能ではないことを現実に行っている」という、それこそ奇妙な事態を認めることになりかねないからである。また、いくらか譲歩して、仮にメガラ派の主張に「現実にAをしている場合にAをすることが可能である」ということが含まれているのだとしても、具体的には後で確認することになるが、アリストテレスはそれを論駁の標的にしていないのであれば、彼が標的として固定しているのは先のような双条件ではないことになる。

したがって、M4がM1･M2の適切な具体例になっているはずだとすれば、M4は、M3前半部の「現実に建築していないならば」と対比をなすことで、実質的には、「現実に建築している場合にのみ」という内容を述べているものとして理解しなければならない。そこで、M3とM4を、より正確な形で書き出してみるならば次のようなものとなろう。

M3：現実に建築していないならば建築することは可能ではない（M2）

M4：現実に建築している場合にのみ建築することが可能である（M1）

そうだとすれば、M1 と M2 が同値であったことからしても、M4 は M3 に新しい内容を付け加えているわけではなくて、むしろ、その言い換えであることになり、したがって、そこでの一般的な定式とその適用例とは M1—M4、M2—M3 という交叉対句的な対応関係にあることになろう。

三つの論駁の概観

メガラ派の主張を批判するにあたりアリストテレスが採用する戦略は、技術、知覚、生成・運動といった具体的な場面に M を適用することでそこから不合理な帰結を導くことにある（これらを以下では順に「第一論駁」、「第二論駁」、「第三論駁」と呼ぶことにする）。そこで、まずは該当箇所の翻訳を引用し、個々の議論を具体的に検討する前にその全体を概観しておくことにしたい。

A 第一論駁（技術の視点から）

「こうした主張に奇妙な帰結が生じるのを見るのは難しくない。なぜなら、明らかに、現実に建築していなければその人は建築家ではないことになってしまうからである（というのも、建築家であるとは建築するのが可能であるということなのだから）。その他の技術についても同様である。しかるに、こうした技術をある時に学習・獲得したのでなければ所持することはありえず、（忘却やなんらかの受難や時間経過によって）喪失する以外にはそれを所持しなくなるということが不可能だとすれば（というのも、ことがらそのものは滅びることはなくいつもあるのだから）、活動を中止した場合には技術を所持しないことになるにもかかわらず、その技術をどうやって獲得してすぐに建築を再開するというのであろうか。」（1046b32-1047a4）

B 第二論駁（知覚の視点から）

「（1）また、魂を持たないもの（無生物）についても同様である。というのも、

冷たさ・温かさや甘さ、そして一般に知覚されるものは、知覚されていないときには存在しないことになってしまうだろう。その結果、こうした主張をする人たちはプロタゴラスの説を語る羽目に陥ることになる。(2) そしてまた実に、何も知覚しておらず実現していないような場合には知覚を持たないことにもなってしまうだろう。そして、もし、本来持つべきものが本来持つべき時期に本来そうある仕方で視力を有するわけではない場合に目が見えないことになるのだとすれば、同一人物が一日のうちに何度も目が見えなくなったり耳が聞こえなくなったりすることになろう。」(1047a4-10)

C 第三論駁（生成・運動の視点から）

「さらに、可能性を欠くものが不可能なものであるとすれば、現に生成していないものは生成不可能だということになろう。しかるに、生成不可能のものがあるとかあることになるだろうと語る者は偽りを述べることになろう（というのも、「不可能」が意味していたのはこのことなのだから）。したがって、こうした主張は運動と生成を否定している。なぜなら、立っている者はいつも立っていることになり、かつ、座っている者はいつも座っていることになるのだから。というのも、座っている者が立ち上がることはないであろう。なぜなら、立ち上がるのが可能ではない者は、立ち上がることが不可能なのだからである。」(1047a10-17)

アリストテレスは、以上の三つの論駁において M から技術、知覚、生成の否定が帰結することを示しながら、背理法によりメガラ派の立場を論駁しようとするわけであるが、そこで導かれてくる背理の具体例はそれぞれ次のようなものであった。

A：現実に建築していない者は建築家ではない

B1：現実に知覚されていない冷たさ・温かさ、甘さは存在しない

B2：現実に見ていない者は目が見えない

C：座っている者は立ち上がることが不可能である

これらの背理のうちで、A と B2 とは、理性の関与の有無の違いはあるにしても、「ーする」という少なくとも文法的には[6]能動的な可能性について語っているもの

である。他方で、B1 は「ーされる」という受動的で非理性的な可能性について語り、C は生成一般を扱っていることからして理性的・非理性的可能性、能動的・受動的可能性を包括する最も根本的な論点とみなすことができよう。

また、すべての論点においてデュナミスの担い手（建築家、知覚対象・知覚主体、座っている人物）が想定されており、また、A、B2、C においてはその存続が、B1 においては知覚対象の主体に先んずる存在が前提されているように見える。これらの点を、先に作業仮説としてあげた論点に照らし合わせるならば、メガラ派論駁でアリストテレスの念頭にあるのは「能力」に基礎をおくような「可能性」であることになろう。

それでは、以上のような概観を確認したところで、次節以降では個々の論駁について分析・検討を加えていくことにしたい。

第一論駁の分析・検討

第一論駁でアリストテレスは、メガラ派の立場からは「現実に建築していない者は建築家ではない」という背理が導かれると述べるが、その根拠としてさらに「建築家であるとは建築するのが可能であることである」を挙げていることから、ここでの議論構造は次のようなものとして構築できるであろう。

1 現実に建築していない者は建築することが可能ではない（M2）

2 建築家であるとは建築するのが可能であるということである

不合理な帰結：現実に建築していない者は建築家ではない

そうだとすれば、メガラ派の主張を批判するにあたりアリストテレスが直接の標的としているのは、主張 M1 というよりはその対偶となる主張 M2、要約すれば、「現実でなければ可能ではない」という主張であり、この議論はそれを仮定した上でその論駁を目指す背理法の構造を持つことになる。

この論証は形式としては妥当なものであろうが、それでもなお、こうしたアリストテレスの批判に対してメガラ派の側から（あるいは第三者の立場から）論証の妥当性そのものは認めたとしても前提に対して再反論ができないわけではない。というのも、メガラ派の立場を援護しようとすれば建築家の定義［前提 2］を認めない

方策を採ることが可能であるからである。例えば、建築家は現実に建築していない限りやはり建築することはできないのであり、建築を再開する場合には突如として建築し始めるのであってそれで何ら不都合はない、と再反論することはできるかもしれない。また、「検証」という視点からすれば、ある行為主体が「A をする」能力を持つことを検証することができるのは「実際に A をしている」とき以外ではありえないと主張することもできよう。

しかしながら、アリストテレス自身がそう指摘するように、そうした場合には、第一に能力の獲得・喪失のプロセスを語ることができなくなり、第二に、行為や出来事について「何ゆえにか」を問う意味がなくなるか、あるいは、そうした問いに意味を認めるにしても、先行する原因や意図に基づくような「説明」の成立可能性を破壊することになろう。メガラ派の図式によれば、例えば、昼休みに弁当を食べている大学教員は、その時点では教師としての能力を持たないのであって、弁当を食べ終わると、その時点ではできもしないことを行おうと意図しながら教場へと移動し、黒板に向かいチョークを持った瞬間に教える能力をたちどころに獲得するということになるが、それはかなり奇妙な絵柄だということになろう。

ただし、なにかの実現をその能力に照らして説明しようとするアリストテレスに対しては、さらに次のように畳み掛けることもできよう。すなわち、どれほど教授能力がある人物でも、黒板やチョーク、大教室でのマイク、ひいては、そもそも聴講してくれる学生がいなければ教えることなどできないのではないのか、という反論である。この反論の主旨は、能力を持っていることだけでは「ーできる」ということの十分条件とはなりえないという点にある。いずれにしても、ここでの重要な論点は「説明」の文脈におけるデュナミス概念の役割をめぐるものであることはまちがいない。そこで、この論点についてはこれ以降の第二論駁・第三論駁の分析・検討において確認していくことにしたい。

第二論駁の分析・検討

第二論駁はそれ自体がまた前半部と後半部の二つの議論からなる。第一論駁とは異なりどちらも理性を伴わない能力にかかわるものではあるが、このうちで後半部

の議論はそれが知覚主体に備わる能力、例えば視力、を問う点で、建築家を扱う第一論駁と併行的な、次のような議論構造を想定することができよう。

1 現実に知覚していない者は知覚能力を持たない（M2）

2 視力を持たない者は目が見えない

不合理な帰結：現実に見ていない者は目が見えない

（同一人物が目が見えたり見えなくなったりする）

第二論駁後半部の議論構造をこのように整理してよいとすれば、この議論も M2 を仮定した上でその論駁を目指す背理法の構造を持つことになり、また、これが第一論駁と併行的に扱えるかぎりにおいて、この議論の効力を第一論駁と同様のものとして見積もることができるであろう。

他方で、第二論駁前半部の議論はメガラ派の主張からプロタゴラス説が帰結するというものであるが、その論述があまりにも簡潔であるため、「人間は万物の尺度である」とするプロタゴラス説がどのような論証を経て帰結するのかはテクストだけからは判然としないし、さらに、M2 からプロタゴラス説が帰結するのだとしても、そもそもアリストテレスがそれの何を背理としているのかもここでの議論だけからは明確ではない。

ともあれ、当該テクストからするかぎり、ここでの議論構造としては少なくとも次のようなものが想定されるであろう。

1 知覚されていないものは知覚可能ではない（M2）

不合理な帰結：知覚対象は知覚されていないときには存在しない

この帰結の具体例としては「炎は知覚されていないときには熱くない」といった命題を考えることができようが、人間によって知覚されていないことが知覚対象となる性質の否定につながることからして、これが「人間尺度説」そのものではないとしても、それと重なる主張であることは比較的見やすいところであろう。また、この帰結は『形而上学』Γ巻（第 4 巻）でアリストテレスがプロタゴラス説を提示する方式にもよく似たものである（1007b23-24）。そこで、第一に確認すべきはこのように導出された帰結がいかなる意味で背理なのかという点である。

『形而上学』Γ巻の大部分は矛盾律と排中律の擁護にあてられているが、その第 5 章冒頭でアリストテレスは、プロタゴラス説が矛盾律を否定する人々と同じ思考

のうちにあると述べる。そのことからすれば、ウィット（Witt）がそう理解するように[7]、少なくともアリストテレスのここでの論駁のひとつのポイントはMがプロタゴラス説を経由して矛盾律に抵触することにあると言うことができるだろう。すなわち、Mを支持する人は結果として「炎は熱いが熱くない」と言う羽目に陥るというわけである。あるいは、第二論駁後半部の視覚の場合と併行的に論じるのであれば、Mを支持する人は結果として「同じ炎が同一人物にとって熱くなったりなくなったりする」と語らざるをえなくなるが、これは視覚の議論がそうであるのと同程度に不合理なこととなるであろう。

次に問うべきは、この議論のプロセスについての問題である。というのも、第二論駁前半部の議論はこのままでは形式として妥当であるとは言えず、ここには潜在的な前提があると想定する必要があるからである。そこで、なんらか妥当な三段論法をここに想定するのであれば、アリストテレスが念頭に置いているのは次のような議論構造であると推定することができるであろう。

1 知覚されていないものは知覚可能ではない（M2）

2 知覚可能ではないものは知覚対象としては存在しない [潜在的前提]

不合理な帰結：知覚対象は知覚されていないときには存在しない

第二論駁前半部の議論構造をこのように組み上げることができるのだとすれば、この議論の形式上の妥当性は確保されることになる。そこで問題とすべきはテクスト外部から挿入された潜在的な前提2の信憑性であるが、第一論駁ですでに見たように、建築することができないものは建築家ではないとすれば、それと併行的にこの前提2も穏当なものとして理解することができよう。

ただし、この前提2に対しては、例えば、「瓶の中の蜂蜜は味わうことができないにもかかわらず甘いと言うのではないか」といった想定反論がありうる。だが、それに対しては「瓶の中の蜂蜜はそれ自体として知覚不可能であるわけではなく、瓶のフタを開けさえすればその甘みを味わうことできる」と応酬することもできよう（誰もいない森の中で咲いている花の色についても同様のことが言える）。先に第一論駁に関連して確認したように、学生がいなければ教えることができないからといってその教師がそれ自体として教えることができないわけではないように、この第二論駁においても「ーできる」と語るにあたって、能力の担い手のみならず、

それを取り巻く外部環境を考慮に入れるべきかどうかという争点が顕在化することになる。

第三論駁の分析・検討

第三論駁は、その帰結として生成一般の否定という背理を提示するものであり、その意味では三つの論駁のうちで最も根本的・包括的なものである。生成の否定という帰結を導くことになる前提としてテクストで明示されているのは「可能性を欠くものは不可能なものである」だけであるが、推論の形式を整えるためには、もうひとつの前提としてここでもやはり M2 に相当するものが仮定されている必要がある。そこで、それを補うことにすれば、第三論駁の議論構造は次のように整理することができるであろう。

1 現に生成していないものは生成可能性を欠いている（M2）

2 可能性を欠くものは不可能なものである

不合理な帰結：現実に生成していないものは生成不可能である

（生成というものはありえない）

形式的にはこれで妥当な推論形式を備えているように見えるが、ここで問題となるのは前提 2 の理解をめぐる問題である。換言するならば、この推論における「不可能」という概念の一貫性の問題である。というのも、ビアーが指摘するように[8]、現時点において生成の能力を欠いているからといって、そのことだけから未来をも含めた生成の不可能性は必ずしも帰結しないように思われるからである。

こうした解釈上の難点についてウィットは、アリストテレスは第三論駁において「不可能（*adunaton*）」というギリシア語が持つ二義性、すなわち、「現時点においてできない（incapable）」と「（将来にわたって）不可能（impossible）」という二義性をうまく利用しているのだという解釈を提案している[9]。しかしながら、そう解する場合にはこの議論の形式としての妥当性を確保できなくなってしまうであろう。また、ビアーは前提 2 を、A をする能力を（現時点で）欠いているものは（現時点で）A をすることができない、という趣旨のものとして解することでこの難点を解決できるとしている[10]。だが、その場合には、そこから現時点での生成不可能

が帰結するとしても、将来にわたる生成不可能を導くにはそれだけでは不十分であろう。

そこで、この問題を考えるためには、能力の所持とその行使の時点の異同に関するアリストテレスの立場を考慮する必要があるように思われる。というのも、Mが能力の所持とその行使の共時性を主張しているのに対して、その論駁を試みるアリストテレスは能力の所持とその行使の異時性を認めていると考えられるからである。こうしたアリストテレスの立場は、『天体論』で様相論が展開される第1巻第12章の次のような箇所によっても確認できるであろう。

> 「人は立つことと座ることの可能性を同時に持っている。なぜなら、一方の可能性を持っている場合には他方も持っているからである。しかし、だからといって座ることと立つことが同時にできるわけなのではなく異なる時点においてそうなのである。」(281b15-18)

つまり、Mとは異なりアリストテレスは、能力に根ざすような「可能」という述語を次に示すように二つの時点を伴う二座の述語とみなしていることになる。

A：ある事態が時点t2に成立することが時点t1において可能

この論点は、そもそも生成というものが二つの時点に言及することで成立するものである以上、とりわけ第三論駁にとっては重要なものであると言える。そこで、生成における二つの時点を明示した上で第三論駁の前提を再定式するならば、その議論構造はM2を複数回適用することで成立するような、次のようないわば一種の数学的帰納法として再構成できるであろう。

0「生成」とはtnに成立していない事態がtn+1に成立することである

1 現時点t1に成立していない事態は次の時点t2に成立しえない（M2）

2 同じ論理によって、一般にtkに成立していない事態はtk+1に成立しえない（M2の複数回の適用）

不合理な帰結：現実に生成していないものは生成不可能である

ただし、この議論に対しても、やはり第一論駁の場合と同様に、座っている人はその時点では立ち上がる能力を欠いてはいるが、立ち上がろうとする時点でその能

力をすぐさま獲得するのだと再反論することはできよう。しかしながら、そうした想定反論に対しては、M によるかぎり、t1 に座っている人は t2 に向けてそもそも立ち上がろうとすることなどできないのだと応酬することになろう。

結　語

メガラ派論駁の分析・検討を通じてこれまで見てきたように、メガラ派とアリストテレスの立場の重要な差異は「能力」というものを認めるかどうかにあると考える必要はない。なぜなら、メガラ派にしても、アリストテレスとは違う仕方ではあるにはせよ、能力について有意味に語りうるからである。むしろ、両者の差異は、「ーできる」という文法の用法において「能力」が果たす説明上の位置付け・意義付けをめぐるものであると推定することができる。それは第一には、「ーできる」ということを語る際にその担い手に焦点あててそれを語るのか、それとも、外部環境・阻害条件を重視した上でそれを語るのかという差異であり、第二には、どの時点に即して可能性・能力を見積もるのかをめぐっての差異である。

他方で、このようにメガラ派論駁の基底に両者間のデュナミス理解の根本的な差異を読み込むことでその議論の妥当性を確保することは、メガラ派論駁の議論の枠組みがそもそもメガラ派に対して公正なものであるのかという疑念をかえって招く結果にもなるかもしれない。だが、たとえそうだとしても、メガラ派論駁の意義は、少なくとも、両者の基底に横たわるデュナミス理解をめぐる潜在的な争点を、そうした論駁を通じて顕在化させるところにあると言うことはできるであろう。

『形而上学』Θ巻第 3 章におけるメガラ派論駁の文脈は当然のことながら Θ 巻第 4 章以降のアリストテレス自身の議論にもなんらかの影響を及ぼしていると予想されることから、本論考はΘ巻の他の章を解釈するための予備作業としての意味を持つことにもなろう。また、ディオドロス・クロノスのいわゆる Master Argument の問題意識の源泉は少なくともアリストテレスまで遡ることができると思われるが、その理解についても今後の課題としたい。

注

1　『形而上学』Θ巻第3章におけるメガラ派論駁については、いまだ実現していない可能性の成立可能性、すなわち、「純粋な可能性」の擁護という視点からすでに一度扱ったことがある（「アリストテレスにおける純粋な可能様相の射程」、『哲学雑誌』795号、2008年、144-161）。本論考の目的は、メガラ派論駁の議論構造を、より詳細に検討することにある。

2　アリストテレスによる「メガラ派」理解が正しいものかどうか、あるいは、ディオドロス・クロノスのいわゆるMaster Argumentに対する「メガラ派」の影響関係については議論がある。本論考ではそうした哲学史・概念史上の問題についての判断は保留し、あくまでアリストテレスが理解するかぎりの意味で「メガラ派」という名称を用いることとする。

3　前掲拙稿第1節参照。

4　Jonathan Beere, *Doing and Being: An Interpretation of Aristotle's Metaphysics Theta*, Oxford, 2009, pp. 91-92.

5　Stephen Makin, *Aristotle: Metaphysics Book Θ*, Oxford, 2006, pp. 60-61.

6　『魂について』第2巻でアリストテレスは、実質的には、「作用を受ける」という意味ではむしろ知覚を受動的なものとして、「作用する」という意味ではむしろ知覚対象を能動的なものとして規定している。

7　Charlotte Witt, *Ways of Being: Potentiality and Actuality in Aristotle's Metaphysics*, Ithaca & London, 2003, pp. 26-27.

8　Beere p. 109.

9　Witt pp. 29-30.

10　Beere p. 114.